

第19回 ソフト・パワーとは何か

ジョセフ・ナイが提唱した「ソフト・パワー」については以下のように説明されている。

本来、「影響力」としてのパワーは、他者にある行動を取らせる「行為としてのパワー」の側面が大きかったが、「ソフト・パワー」は他者が自発的にある行動を取るようにするための「不作為としてのパワー」とも言える概念であり、そうした概念が重要視されていること自体、国際政治環境の変化とそれに伴うパワー概念の継続的な変容を示していると言える。⁽¹⁾

彼の実際の著述、*Bound to Lead: The Changing Nature of American Power* (1990)は『不滅の大国アメリカ』（読売新聞社、1990年10月）として久保伸太郎(1944-)によってすでに翻訳されており、次のような記述がある。

...the universalism of a country's culture and its ability to establish a set of favorable rules and institutions that govern areas of international activity are critical sources of power. As we shall see in greater detail in chapter 6, these soft sources of power are becoming more important in world politics today.

Such considerations question the conclusion that the world is about to enter a Japanese ear in world politics. The nature of about to enter is changing and some of the changes will favor Japan, but some of them may favor the United States even more.⁽²⁾

一国の持つ文化の普遍性と、国際的活動の領域を取り仕切るルールや制度を有利に確立できる能力とが、決定的な力の源泉なのである。第六章で詳述するが、こうした力の源泉のソフトな面は、今日の世界の政治に

あつては、ますます重要になりつつある。

このような考え方は、政治のうでで世界が日本の時代に入ろうとしているとの結論に疑問をさしはさむ。力の本質は変わりつつあり、その変化のある部分は日本にとって有利に働くだらう。(3)

ナイのソフト・パワー概念の変遷はどうなっているのだろうか。

よく知られているように、soft power 概念はポール・ケネディに代表されるアメリカ覇権衰退論への反論として、ジョセフ・ナイが1990年に“The Misleading Metaphor of Decline”で使ったのが最初である。彼は、それに続く“The Changing Nature of World Power”で同概念を精練し、*Bound to Lead*(1990)において初期版の鋳型を完成させた。その時点での「ソフト・パワー」の概念構成は、どのようなものであろうか。

(省略)“The Changing Nature of World Power”論文の注の部分で、ナイが初めて体系的に soft power 概念を導出した部分である。ナイは当初、(1) soft power resources と hard power resources という、力の資源の分類と、(2) direct power behavior と co-optive (indirect) power behavior という力の性格の分類を提示していた。(4)

詳細な分析については、上記でも引用した芝崎厚士「国際文化現象としての国際関係研究—ソフト・パワー概念を中心に—」(2007)がよい参考となる。

Bound To Lead(1990)、*The Paradox of American Power*(2002)でもソフト・パワーについて触れているが、*Soft Power: The Means To Success in World Politics*(2004)は『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞出版社、2004年9月)として山岡洋一(1941-)によって翻訳され、すでに定着した言葉になっている。

What is soft power? It is the ability to get what you want through attraction rather than coercion or payments. It arises from the

attractiveness of a country's culture, political ideals, and policies. ⁽⁵⁾

ソフト・パワーとは何なのか。それは、強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力である。ソフト・パワーは国の文化、政治的な理想、政策の魅力によって生まれる。⁽⁶⁾

ナイは他の論文でも以下のように述べている。

本質的に、パワーとはほしいものを手にいれるために、他者に影響を及ぼす能力を意味しているにすぎませんが、これには一連の手段が必要です。威圧や報復といったハード・パワーを行使する手段もあれば、魅力といったソフト・パワーを使う方法もあります。

個人のレベルでは、カリスマ性（感情に訴える魅力）、ビジョン、コミュニケーションなどがソフト・パワーといえます。また国のレベルでは、ソフト・パワーはその国の文化、価値観、政策のなかで具現化されます。⁽⁷⁾

東西ベルリンの壁崩壊後、9・11のアメリカの同時テロなど、軍事力に代表されるハード・パワーだけに頼る外交はもはや通用しないことははっきりしてきた。こうしたことはサミュエル・ハンチントン(Samuel P. Huntington, 1927-2010)の *The Clash of Civilizations* (1993)、*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (1996)でも予言されていたことでもある。異文化の理解こと重要ということになれば、ソフト・パワーのアイテムとして文化が注目を浴びるのも当然のことであろう。

注

- (1) 伊藤剛「パワー」(猪口孝他編『国際政治学事典』弘文堂、2005年12月)、p.807.

- (2) Nye, Jr. Joseph S. *Bound to Lead: The Changing Nature of American Power* (New York: Basic Books, 1990), p.33.
- (3) ジョセフ・S・ナイ、Jr./久保伸太郎訳『不滅の大国アメリカ』（読売新聞社、1990年10月）、p.49.
- (4) 芝崎厚士「国際文化現象としての国際関係研究—ソフト・パワー概念を中心に—」（『インターカルチャル』第5号、アカデミア出版、2007年6月）、p.97.
- (5) Nye, Jr. Joseph S. *Soft Power: The Means To Success in World Politics* (New York: Public Affairs, 2004), p.x
- (6) ジョセフ・S・ナイ、Jr./山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』（日本経済新聞出版社、2004年9月）、p.10.
- (7) ジョセフ・S・ナイ、Jr./ダイアン・L・クーツ/編集部訳「ソフト・パワーを使い分けるスマート・パワー」（『Harvard Business Review』第34巻第2号、2009年2月）、p.108.